

# 一つぶのケシの種たね



インドのある村に、若いお母さんと、ご主人と、子どもがなかよくいっしょに、くらしでいました。

やっと、よちよち歩きをはじめた子どもは、お母さんのたからでした。

ところが、そんなしあわせなある日、子どもが病気になって、たったひと晩のうちに亡くなってしまうのです。

ものもいわないし、笑いも、泣きもしないつめたくなった子どもを、お母さんはしっかりとだきしめていました。お母さんは、まだ人の死ぬのを見たことがなく、人間はどんな人でも、かならず死ななくてはならないものだ、ということも、しりませんでした。

あつまった人たちがいました。

「この子は、もう死んだのだ。だから、お葬式をしてやらないと……。」

それをきいたお母さんは、

「なにをいうのですか。わたしの子どもは、病気にかかっているだけです。薬さえめば、すぐなおってしまいます。」

そういって、みんなを追いかえしてしまいました。

お母さんは、つめたくなった子どもをだいて、村から町へ、一けん一けんたずねて歩きまわりました。

「わたしの子どもは、こんなふしぎな病気にかかりました。なにか、良いお薬をおしえてください。」

それをきいて、みんないいました。

「かわいそうに。この子は、もう死んでいるのです。死んだものにのませる薬など、どの世界にもありませんよ。」